

ワキ「月は昔の友ならば。月はむかしの友ならば。世の外いづくならまし　これは諸国一見の僧にて候。われ未だ津の国天王寺に参らず候程に。此度おもひ立ち天王寺に参らばやと思ひ候
都をば。まだ夜深きに旅立ちて。まだ夜深きに旅立ちて。淀の川舟行く末は。鶴殿の蘆のほの見えし。松の煙の波寄する。江口の里に着きにけり江口と里につきにけり

ワキ「さてはこれなるは江口の君の旧跡かや。痛はしや其の身は土中に埋むといへども。名は留まりて今までも。昔語の旧跡を。今見ることの哀さよ。げにや西行法師此所にて。一夜の宿を借りけるに。主の心なかりしかば。世の中を厭ふまでこそ難からめ。假の宿りを惜む君かなと詠じけんも。此処にての事なるべし。あら痛はしや候

シテ「のういあれなる御僧。今の歌をば何と思ひよりて口ずさみ給ひ候ぞ

ワキ「不思議やな人家も見えぬ方よりも。女性一人来りつ。今の詠歌の口ずさみを。いかにと問はせ給ふこと。そも何故に訊ね給ふぞ　シテ「忘れて年を経しものを。また思ひ染む言の葉の。草の陰野の露の世を。厭ふまでこそ難からめ。假の宿りを惜むとの。その言の葉も恥かしければ。さのみは惜みまゐらせざりし。その理をも申さん為に。これまで現れ出でたるなり

ワキ「心得ず假の宿りを惜む君かなと。西行法師が詠せし跡を。ただ何となく弔ふところに。さのみは惜まざりにしと。ことわり給ふ御身はさて。いかなる人にてましますぞ

シテ「いやさればこそ惜まぬ由の御返事を。申し歌をば何とてか。詠じもせさせ給はざるらん

ワキ「げにその返歌の言の葉は世を厭ふ　シテ「人とし聞けば假の宿に。心留むなど思ふばかりぞ。心留むなど捨人を。諫め申せば女の宿りに。泊めまゐらせぬも理ならずや　ワキ「げに理なり西行も假の宿りを捨人といひ
シテ「こなたも名に負ふ色好の。家にはさしも埋れ木の。人知れぬ事のみ多き宿に　ワキ「心留むなど詠じ給ふは
シテ「捨人を思ふ心なるを　ワキ「ただ惜むとの　シテ「言の葉は

地「惜むこそ。をしまぬ假の宿なるを。惜まぬ假の宿なるを。などや惜むとゆふ波の。返らぬ古は今とても。捨人の世語に。心な留め給ひそ

地「げにや浮世の物語。聞けば姿も黄昏に。かげろふ人はいかならん　シテ「たそかれに。佇む影はほのぼのと。見え隠れなる川隈に。江口の流の君とや見えん恥かしや　地「さては疑あら磯の。波と消えにし跡なれや
シテ「假に住み来し我が宿の　地「梅の立枝や見えつらん　ワキ「思の外に
地「君が来ませるや。一樹の蔭にや宿りけん。又は一河の流の水。汲みても知らしめされよや。江口の君の幽霊ぞと聲ばかりして失せにけりこゑばかりして失せにけり

中入

ワキ「さては江口の君の幽霊かりに現れ。われに言葉を交しけるぞや。いざ弔ひて浮かめんと
云ひも敢ねばふしぎやな。云ひも敢ねば不思議やな。月澄みわたる川水に。遊女の謡ふ舟遊。月に見えたる不思議さよ月に見えたるふしぎさよ

地「川舟を。泊めて逢瀬の波まくら。留めて逢瀬の波枕。浮世の夢を見慣はしの。驚かぬ身の儂さよ。佐用姫が松浦湯。片敷く袖の涙の唐土船の名残なり。また宇治の橋姫も。訪はんとせぬ人を待つも身の上と哀なり。縦しやよし野の。よしや吉野の花も雪も雲も波もあはれ。世に遇はばや

ワキ「不思議やな月澄みわたる水の面に。遊女の数多うたふ謡。色めきあへる人影は。そも誰人の舟やらん
シテ「なに此の舟を誰が舟とは。恥かしながら古への。江口の君の川逍遥の。月の夜舟を御覧ぜよ　ワキ「抑や江口の遊女とは。それは去りにし古への　シテ「いや古へとは。御覧ぜよ月は昔に変わらめや　ツレ「我等もかやうに見え来るを。古へ人とは現なや

シテ「よし何かと宣ふとも　ツレ「言はじや聞かじ　シテ「おつかしや

同「秋の水。漲り落ちて去る舟の　シテ「月も影さす。棹の歌

地「うたへや謡へ泡沫の。あはれ昔の恋しさを今も。遊女の舟遊。世を渡る一節を謡ひていざや遊ばん

地「それ十二因縁の流轉は車の庭に廻るが如し シテ「鳥の林に遊ぶに似たり 地「先生又先生
シテ「かつて生々の前を知らず 地「来世猶来世。さらに世々の終を辨ふることなし

シテ「或ひは人中天上の善果を受くといへども 地「顛倒迷妄して未だ解脱の種を殖ゑず シテ「或ひは三途ハ
難の悪趣に墮して 地「患に障へられて既に發心の媒を失ふ シテ「然るにわれら偶々受け難き人身を受け
たりと雖も

地「罪業深き身と生れ。殊に例少なき川竹の流の女となる。前の世の報まで。思ひやるこそ悲しけれ

紅花の春の朝。紅錦繡の山粧ひをなすと見えしも。夕べの風に誘はれ黄葉の秋の夕べ。黄纈纈の林。色を含
むといへども朝の霜にうつろふ。松風羅月に言葉を交す賓客も。去つて来ることなし。翠帳紅閨に。枕を並べし
妹背もいつの間にかは隔つらん。凡そ心無き草木。情有る人倫いづれ哀を免るべきかくは思ひ知りながら。

シテ「或時は色に染み貪着の思浅からず

地「また或時は。聲を聞き愛執の心いと深き心に思ひ口に言ふ妄舌の縁となるものを。げにや皆人は六塵の境に
迷ひ六根の罪を作ることも。見る事聞く事に迷ふ心なるべし おもしろや

序ノ舞

シテ「實相無漏の大海に。五塵六欲の風は。吹かねども 地「隨縁真如の波の。たぬ日も無し立たぬ日もなし

シテ「波の立居も何ゆゑぞ。假なる宿に。こゝろ留むるゆゑ 地「心とめずは浮世も有らじ シテ「人をも慕はじ

地「待つ暮も無く シテ「別れ路もあらし吹く 地「花よ紅葉よ。月雪のふることも。あら由なや

シテ「おもへば假の宿 地「思へば假の宿に。こゝろ留むなど人をだに。諫めし我なり。これまでなりや帰るとて。即
ち普賢菩薩と現れ舟は白象となりつ。光と共に白妙の白雲にうち乗りて西の空に行き給ふありがたくぞ覚ゆる
ありがたくこそはおぼゆれ

※物語の進行把握の目的でご用意しました。「梅若本」を基に作成してありますが、ワキ狂言の言葉は当日通りで
はないこと、了承ください。